8.20

#### 読響サマーフェスティバル2017《三大交響曲》 東京芸術劇場コンサートホール/14時開演

YNSO Summer Festival 2017 "Three Greatest Symphonies" Sunday, 20th August, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

P. 5

コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

シューベルト 交響曲 第7番 ロ短調 D759 〈未完成〉[約25分] ----- P.10 SCHUBERT / Symphony No. 7 in B minor, D759 "Unfinished"

- I. Allegro moderato
- II. Andante con moto

ベートーヴェン 交響曲 第5番 ハ短調作品67 〈運命〉[約31分] ····· P.11 BEETHOVEN / Symphony No. 5 in C minor, op. 67

- I . Allegro con brio
- ${\rm I\hspace{-.1em}I}$  . And ante con moto
- Ⅲ. Allegro IV. Allegro

[休憩 Intermission]

ドヴォルザーク 交響曲 第9番 ホ短調作品95 〈新世界から〉[約40分] ----- P.12 DVOŘÁK / Symphony No. 9 in E minor, op. 95 "From the New World"

- I . Adagio Allegro molto
- ${\rm I\hspace{-.1em}I}$  . Largo
- ■. Molto vivace
- IV. Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団 [事業提携] 東京芸術劇場 8.24 [\*]

読響サマーフェスティバル 2017 《ルイージ特別演奏会》 東京芸術劇場コンサートホール/19時開演

YNSO Summer Festival 2017 "Special Concert" Thursday, 24th August, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

8.25 [金]

読響サマーフェスティバル 2017《ルイージ特別演奏会》 横浜みなとみらいホール/15時開演

YNSO Summer Festival 2017 "Special Concert" Friday, 25th August, 15:00 / Yokohama Minato Mirai Hall

R. シュトラウス **交響詩** 〈ドン・ファン〉作品20 [約17分] ------------ P.13 R. STRAUSS / Don Juan, op. 20

ハイドン 交響曲 第82番〈熊〉ハ長調 Hob. I:82 [約27分] ------ P.14 HAYDN / Symphony No. 82 in C major, Hob. I:82 "L'ours"

- I. Vivace assai
- II. Allegretto
- II. Menuetto
- IV. Vivace

[休憩 Intermission]

R. シュトラウス 交響詩 〈英雄の生涯〉作品40 (第1稿) [約45分] …… P.15 R. STRAUSS / Ein Heldenleben, op. 40 (1st version)

- I. 英雄 II. 英雄の敵 III. 英雄の伴侶 IV. 英雄の戦い -
- V. 英雄の業績 W. 英雄の引退と完成

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団、東京芸術劇場 (8/24)

[協力] 横浜みなとみらいホール (8/25)

[後援] FMヨコハマ (8/25)

8.28 [H]

読響サマーフェスティバル 2017《三大協奏曲》 東京オペラシティ コンサートホール/18時30分開演

YNSO Summer Festival 2017 "Three Greatest Concertos" Monday, 28th August, 18:30 / Tokyo Opera City Concert Hall

指揮/海老原光 Conductor HIKARU EBIHARA	P. 7
ヴァイオリン/キム・ボムソリ Violin BOMSORI KIM	P. 8
チェロ/岡本侑也 Cello YUYA OKAMOTO	P. 8
ピアノ/ダニール・ハリトーノフ Piano DANIEL KHARITONOV	P. 9
コンサートマスター/長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA	

# メンデルスゾーン ヴァイオリン協奏曲 ホ短調作品64 [約26分] \*\*\*\*\* P.17 MENDELSSOHN / Violin Concerto in E minor, op. 64

- I. Allegro molto appassionato II. Andante -
- II. Allegro non troppo Allegro molto vivace

#### 

- I. Allegro
- II. Adagio ma non troppo
- ■. Allegro moderato

#### [休憩 Intermission]

チャイコフスキー ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調作品23 [約32分] …… P.19 TCHAIKOVSKY / Piano Concerto No. 1 in B flat minor, op. 23

- I . Allegro non troppo e molto maestoso Allegro con spirito
- II. Andantino semplice
- III. Allegro con fuoco

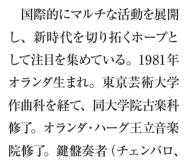
[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団

# Aestro of the month

# 鈴木優人

Iasato Suzuki

日本期待のホープマルチな才能に注目



オルガン、ピアノ)、指揮者としてバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) など国内外のオーケストラ、アンサンブル公演に多数出演し、その演奏は「火花が散るほど熱くて説得力がある」(独フォノ・フォラム誌)と高く評価されている。父はBCJを創設した鍵盤奏者(チェンバロ、オルガン)、指揮者の鈴木雅明。

音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開。2015年5月にラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポンでBCJを指揮した〈マタイ受難曲〉で好評を博した。また、同



年11月の東京芸術劇場開館25周年記念コンサートでは、BCJの合唱や芸劇ウインド・オーケストラとの多彩なプログラムを披露し、とりわけ東響を指揮したメシアン〈トゥーランガリラ交響曲〉では高い評価を得た。

作曲家としても活躍するほか、13年からスタートした調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務めるなど、多岐にわたり活動している。第18回ホテルオークラ音楽賞受賞。NHK・FM「古楽の楽しみ」にレギュラー出演中。読響とは2度目の共演。

◇8月20日 読響サマーフェスティバル2017《三大交響曲》

# ファビオ・ルイージ

Fabio Luisi

世界的マエストロ 読響に初登場

世界一流のオーケストラや歌 劇場で大活躍中のイタリアの巨 匠が、読響に初登場する。とり わけドイツものに一家言あるマエ ストロが、リヒャルト・シュトラウ スの交響詩〈英雄の生涯〉で、ど んな絢爛豪華な音絵巻を聴かせ てくれるか。

1959年イタリア・ジェノヴァ生まれ。 地元の音楽院でピアノを修めた後、オー ストリアのグラーツ国立音楽大学で指揮 を学び、グラーツ歌劇場で指揮者として のキャリアをスタートさせた。90年代か らウィーン・トーンキュンストラー管、ス イス・ロマンド管、ライプツィヒ放送響な どの首席指揮者や芸術監督を歴任した 後、2005年にウィーン響の首席指揮者 (13年まで)、07年にドレスデン国立歌 劇場およびシュターツカペレ・ドレスデン の音楽総監督(10年まで)に就任し、 世界的に注目される存在となった。



Barbara Luisi ©BALU Photography

情熱的かつ精緻な音楽作りをオペラ とシンフォニーの両方で実践しており、 首席指揮者を務めるメトロポリタン歌劇 場でのワーグナー〈ニーベルングの指環〉 4部作で高い評価を受けたほか、R.シ ュトラウスやブルックナーでも定評があ る。16~17年シーズンはフィラデルフィ ア管、ミラノ・スカラ座管、ミュンヘン・ フィル、ロンドン響に客演する。現在、 チューリヒ歌劇場音楽総監督、デンマ ーク放送響首席指揮者。18年からフィ レンツェ歌劇場音楽監督に就く予定。

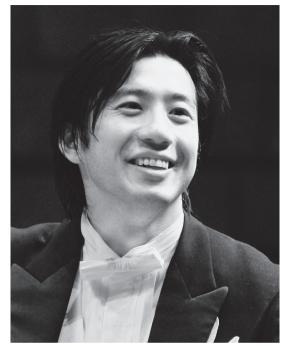
> ◇8月24日、25日 読響サマーフェスティバル2017 《ルイージ特別演奏会》

# 海老原光

読響に新風呼ぶか 俊英の熱きタクト

2007年のロヴロ・フォン・マタ チッチ国際指揮者コンクールで 第3位となった俊英が、今年の 《三大協奏曲》で指揮台に立つ。 ヴァイオリン、チェロ、ピアノの 若手3人を盛り上げる熱きタクト が、読響に新風を呼ぶことがで きるか期待が高まる。

1974年鹿児島生まれ。幼い頃から ピアノやヴァイオリン、クラリネットを学 び、鹿児島ラ・サール高校から東京芸 術大学に進む。同大学院修了後、ハン ガリー国立歌劇場で研鑽を積んだ。指 揮を小林研一郎、コヴァーチ・ヤーノシ ュに師事。2004年から2年間、東京 シティ・フィルの指揮研究員となり、飯 守泰次郎、矢崎彦太郎らの薫陶を受 け、10年から15年まで東京シティ・フィ ルのアソシエイト・コンダクターを務め た。09年ニコライ・マルコ国際指揮者 コンクールで第6位。10年アントニオ・



ペドロッティ国際指揮者コンクールで審 **查員特別賞**。

これまでに日本フィル、新日本フィル、 都響、東響、東フィル、神奈川フィル、 群馬響、仙台フィル、名古屋フィル、京 都市響、大阪フィル、大阪響、関西フ ィル、広島響、九州響など国内の主要 オーケストラと客演を重ねているほか、 海外ではクロアチア放送響などを指揮 している。また、霧島国際音楽祭に11 年から毎年出演している。

読響との共演は3回目となる。

◇8月28日 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》

# A

#### rtist of the month



©Jaeyoung Hec

## ヴァイオリンキム・ボムソリ

Violin Bomsori Kim

1989年韓国生まれ。2010年仙台国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門で最年少入賞(4位)し、聴衆賞を受賞。13年ARDミュンヘン国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門で最高位(1位なしの2位)。16年にはヴィエニャフスキ国際ヴァイオリンコンクールとモントリオール国際音楽コンクール・ヴァイオリン部門で共に2位となり、注目を浴びた。ソウル大学を卒業し、現在は米国ジュリアード音楽院に留学中。これまでにモントリオール響、ワルシャワ国立フィル、フィンランド放送響、仙台フィルなどと共演している。読響初登場。

◇8月28日 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》



Shigeto Imura

# チェロ 岡本侑也

Cello Yuya Okamoto

2017年6月にブリュッセルで開かれたエリザベート王妃国際音楽コンクールのチェロ部門で第2位に輝いた、日本期待の新星。

1994年東京生まれ。10代初めから 国際コンクールで頭角を現し、16歳で 初の本格的リサイタルを開いた。2011 年日本音楽コンクール・チェロ部門第1 位。東京芸術大学に進み研鑽を積むか たわら、堤剛らのマスタークラスを受 講。現在、ミュンヘン音楽大学に留学 中。これまでに東フィル、都響、日本フィル、仙台フィル、セントラル愛知響な どと共演している。読響初登場。

◇8月28日 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》



ピアノダニール・ハリトーノフ

Piano Daniel Kharitonov

1998年サハリン生まれ。5歳よりピアノを始め、モスクワ音楽院の名教師、ヴァレリー・ピャセツキーに師事。2005年わずか7歳でモスクワ・フィルと共演し、話題を呼んだ。早くから国際コンクールで数々の入賞を果たし、13年には米国カーネギーホールへのデビューを果たした。

ゲルギエフやスピヴァコフら著名指揮者から才能を認められ、これまでにロシア国内のほかヨーロッパなど20か国で主要オーケストラとの共演や一流ホールでのリサイタルなど精力的な活動を続けている。読響初登場。

◇8月28日 読響サマーフェスティバル2017《三大協奏曲》

8.20 [H]

柴汁純子(しばつじじゅんこ)・音楽評論家

シューベルト

### 交響曲 第7番 口短調 D759〈未完成〉

作曲: 1822年/初演: 1865年12月17日、ウィーン/演奏時間: 約25分

フランツ・シューベルト(1797~ 1828) の創作の中期 (1820~24年) に は未完成の作品がいくつかあるが、こ の交響曲もそのひとつである。シュー ベルトは、これまで誰も聴いたことが ない響きを交響曲で実現したいと考え て、試行錯誤の末、ロ短調の新しい交 響曲に着手する。尊敬するベートーヴ ェンの第5交響曲を手本に、トロンボ ーンは3本で、主題を循環させて全体 を構成しようとした。ピアノ・スケッ チは第3楽章の途中まで完成していた ので、最初の二つの楽章は順調に進ん だ。しかし、第3楽章に入ったところ で作曲は中断されてしまう。翌年には 自筆譜を年長の知人に渡してしまい、 作曲が再開されることはなかった。

楽譜はシューベルトの死後、1865

年にウィーン楽友協会の指揮者ヨハン・ヘルベックによって発見され、彼の指揮で初演された。

第1楽章 アレグロ・モデラート チェロとコントラバスのもの悲しい序奏に続いて、オーボエとクラリネットでのびやかな第1主題が歌われ、チェロで始まる第2主題は憧れに満ちている。この二つの主題が劇的に展開する。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 弦楽器の穏やかな第1主題と木管楽器 で歌い継がれる第2主題が提示され、ホルンと木管楽器の対話を経て主部が 再現される。安らぎに満ちた美しさと 苦悩の間を揺れ動きながら静かな余韻 を残す。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

#### ベートーヴェン

### 交響曲 第5番 ハ短調作品67〈運命〉

作曲: 1807~1808年/初演: 1808年12月22日、ウィーン/演奏時間: 約31分

冒頭の四つの音から成る動機について、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)が「運命はこのように扉をたたく」と語ったという逸話から、交響曲第5番は〈運命〉の通称で親しまれている。しかし今ではこれは、弟子のアントン・シンドラーによる作り話との説が有力である。

第5番の断片的なスケッチは、第3番〈英雄〉を完成直後の1804年頃から見られるが、実際の作曲は、07年から翌年にかけて第6番〈田園〉とともに集中的に行われた。1802年に精神的な危機を克服して以来、個性的な傑作の数々が生み出されたが、これらの交響曲は、そのひとつの到達点といえるだろう。

第5番は、強烈な印象を残す「運命 動機」がさまざまなかたちで各楽章に 現れ、交響曲全体を統一する。そして この動機を中心とする闘争的な性格 と、後半では「闇から光へ」という勝 利へ至る道筋が音楽で強調された。

第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ 「運命動機」が次々とたたみかける第1 主題と、ホルンの導入を経て現れる穏 やかな第2主題によるソナタ形式。緊 追した音楽が展開されるなか、再現部 でオーボエの旋律が浮かび上がると、 ふと流れが止まった印象を与える。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート 第1楽章の緊張がほぐれる、優しい 主題で始まる。二つの主題による変 奏曲。

第3楽章 アレグロ 低音の弦楽器 の湧き上がるような主題と、ホルンに よる「運命動機」の変形を用いたスケルツォ楽章。明朗な中間部「トリオ」を挟み、最後に弱音のティンパニの連打に導かれて切れ目なく終楽章に突入する。

第4楽章 アレグロ 音楽は短調から長調へと移り、「闘争から勝利へ」導かれる。その勝利を強調するかのように、ベートーヴェンの交響曲で初めて3本のトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットが採用された。力強い第1主題と「運命動機」に由来する第2主題が提示される。展開部で第3楽章の主題が現れ、一瞬、過去の闇を回想するが、最後は長大なコーダで全曲を堂々と締めくくる。

楽器編成/フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、弦五部

#### ドヴォルザーク

### 交響曲 第9番 \*短調 作品95〈新世界から〉

作曲: 1893年/初演: 1893年12月16日、ニューヨーク/演奏時間: 約40分

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザーク (1841~1904) の最後の交響曲となった第9番は、アメリカ滞在中の1893年に作曲された。前年にニューヨークのナショナル音楽院の初代院長に招かれて渡米したドヴォルザークは、都会の喧騒や冬の厳しい寒さに戸惑いながらも、新しい土地で新たな創作意欲をかき立てられた。当地で知った黒人霊歌やアメリカ先住民の歌や民謡に触れるうちに、アメリカの音楽への興味も広がっていった。

ドヴォルザークは、自作にこれらの 要素を取り入れるが、民謡の旋律をそ のまま引用するのではなく、アメリカ 的な素材にスラヴ的な情熱を融合させ て用いた。

この交響曲では中間の二つの楽章で、ロングフェローがアメリカ先住民の神話的英雄を扱った長編物語詩「ハイアワサの歌」から着想を得ているが、そこにはボヘミアへの郷愁の思いも込められている。

第1楽章 アダージョ~アレグロ・モルト ゆるやかな序奏を経て、力強い主部に入ると、ホルンの鋭いリズムが

特徴的な第1主題が提示され、これは続く三つの楽章でも現れる。フルートとオーボエのボヘミアのポルカを思わせる主題や、フルートによる鄙びた味わいの第2主題が加わり展開する。

第2楽章 ラルゴ 有名な旋律が、イングリッシュ・ホルンでしみじみと歌われる。中間部で管楽器はコントラバスのピッツィカートとともに歌い、ヴァイオリンの豊かな旋律も印象的である。

第3楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ティンパニとトライアングルの強打で 開始される民俗舞曲風の音楽。主題が さまざまな楽器に受け渡され、木管楽 器が主体となる中間部は、軽やかに歌 われる。

第4楽章 アレグロ・コン・フォーコ 弦楽器の序奏の後、トランペットとホルンによる強烈な第1主題と、クラリネットによる穏やかな第2主題が現れる。展開部ではこれまでの三つの楽章 の主題が回想され、壮大なクライマックスへと向かう。

楽器編成/フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、シンバル)、弦五部

8.24 [\*]

8.25 金

**舩木篤** 化 (ふなき あつや)・音楽評論家

# R.シュトラウス **交響詩〈ドン・ファン**〉作品20

作曲: 1888年/初演: 1889年11月11日、ワイマール/演奏時間: 約17分

ミュンヘン生まれのリヒャルト・シュトラウス (1864~1949) — ワルツ王、ヨハン・シュトラウスの一家とは無関係 — は、ワーグナーばりのオペラを20世紀まで書き継いだ人として有名である。だが意外にもと言うべきか、当初はモーツァルトに範をとる古典主義者であった。

そんな彼が考えを変えるきっかけがあった。1885年、若くしてマイニンゲンの宮廷劇場の指揮者に就任し、そこのヴァイオリン奏者、アレクサンダー・リッターに感化されたのだ。シュトラウスは回想する。「表現豊かなもの、詩的なものを、音楽において展開し、それをベルリオーズ、リスト、ワーグナーが示した方法でやるようになったのは、彼の強い勧めがあったからである」詩的なもの。つまりは想像力を刺激

詩的なもの。つまりは想像力を刺激 することば。シュトラウスが、1888年、 この交響「詩 | を書くにあたり刺激を 受けたことばは、ニコラウス・レーナ ウの詩「ドン・ファン」だった。「目に もあやなる魅惑の女ども、その魔の圏 域を、はてしなき世界を、私は、経め ぐりたい、歓楽の嵐にまみれて。そし て果てよう、最後の女に、口づけて」

もっとも、フランツ・リストが先鞭を つけた「交響詩」は、詩の内容を音で描 写するといった体のものではない。詩的 イメージは、交響曲でもないオペラでも ない新種の管弦楽曲を創出するための、 いわば方便であったとみるべきだろう。

はやてのように駆けめぐるヴァイオリンに、希代の色男ドン・ファンの足どりを思うのもいい。夢見るようなオーボエのソロに愛の告白を聴くのもいい。けれども、どれが何を表現しているという確証は、実のところない。確かなのは、それらがソナタ形式とロンド形式に二股かけたようなユニークな構造をもつ本作の、音楽素材となっている点だ。

楽器編成/フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン、クラリネット2、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(トライアングル、グロッケンシュピール、シンバル、サスペンデッド・シンバル)、ハープ、弦五部

#### ハイドン

### 交響曲 第82番〈熊〉ハ長調 Hob. I:82

作曲:1786年/初演:同年?、パリ/演奏時間:約27分

さてここで、交響詩のシュトラウスから、交響曲のハイドンに移る。時代は19世紀末から18世紀末へと戻る格好だ。

100作以上にのぼるヨーゼフ・ハイドン (1732~1809) の交響曲だが、うち「パリ・セット」と呼ばれる一連の作品がある。第82番から第87番の6曲がそれで、これから聴くのは、その第82番である。

セットの呼称は、パリの演奏会興行 組織「コンセール・ド・ラロージェ・オ ランピーク | からの注文に応じたこと に由来する。発注は1784年。もっと も、当時エステルハージ侯爵家に仕え ていたハイドンは、その宮殿のあるア イゼンシュタット (ウィーンから60キ 口ほど南にある)、およびウィーンか ら遠く離れることはなく、パリには、 それ以前もそれ以後も行ったことがな い。そんな彼がこのような注文を受け たのは、かの地でハイドンの作品がす でに人気を博していたからであり、こ のことはとりもなおさず、彼の楽譜 が、海賊版を含め、外国にまで流布し ていたことを示唆している。作曲家が 特定地域の王侯貴族や教会組織だけを 頼りに活動する時代は、終わりつつあ ったのだ。なお、この「コンセール~」 を組織していたのは、フリーメイソン であり、ハイドン自身、この秘密結社 の会員であった。

パリ側から提示された報酬も高額な

もので、ハイドンは異国の依頼に腕まくりをして挑んだに違いない。6曲はいずれも、それまでの交響曲の定石をやぶる新機軸を打ち出している。もっとも、試演はエステルハージ家のオーケストラを用いて行われたのであるが。 第1楽章 ドミソの上昇音で華々しく始まるハ長調のヴィヴァーチェ(生き生きと)楽章。行進曲タッチもうか

第2楽章 へ長調のテーマとへ短調のテーマを変奏してゆく二重変奏曲。 第3楽章 レントラー (オーストリアの舞踊) 風の中間部をもつメヌエット 楽章。

がえるが、拍子をわざと乱すようなト

リッキーなところも。

第4楽章 随所で顔を出すバグパイプのようなドローン(長くうなる低音)が大胆。のちに広まった〈熊〉のニックネームはこれに由来する。歳の市などの見世物で、楽器に合わせて熊を躍らせたことからくる連想であろう。

R.シュトラウス

### 交響詩〈英雄の生涯〉作品40 (第1稿)

作曲:1898年/初演:1899年3月3日、フランクフルト・アム・マイン/演奏時間:約45分

演奏会の後半は、再びシュトラウスへ。先に「ワーグナーばりのオペラ」を書き継いだ人と記したが、シュトラウス最初のオペラ〈グントラム〉は、1892~93年の作(改訂1934年)。〈ドン・ファン〉もそうだが、彼の数ある交響詩は、作曲年代を見ると、このオペラ第1作よりも前に集中的に書かれていることが分かる。あたかも、精緻な管弦楽をともなったオペラを実現するための、予行演習かのように。

交響詩〈英雄の生涯〉は、シュトラウスのそんな交響詩時代の、いわば仕上げの仕事にあたる。プロイセン宮廷管弦楽団の楽長職に就いた年、1898年に完成した。

切れ目なく演奏される45分ほどの 楽曲であるが、全体は6部に分けられ、 各部には、下に掲げるような題が付さ れている。このうち、たとえば第3部 の"伴侶"を、「あれは私の妻のことだ」 とシュトラウスが言ったと伝えられて おり、また第4部後半と第5部には、 シュトラウスがそれまでに発表した交 響詩からの引用がちりばめられていた りもする。そんなところから、題にい う「英雄」とはすなわち作曲者自身の ことであるという定説が生まれ、これ は揺るぎないようにみえる。

しかし一方で、全6部に付せられたこれら標題が、初演の直前になって書き加えられたものであるという事実を、どう理解すべきか? この標題付けは、シュトラウス派の一人、フリードリヒ・レッシュなる人物の提案に従った措置であった。つまり、作曲者本来の意図ではなかったのではないか。

シュトラウスは一時期、本作に「変ホ長調の交響曲」という副題をそえることを考えていたという。変ホ長調の交響曲。英雄。そう、古典派交響曲の傑作、ベートーヴェンの交響曲第3番変ホ長調〈英雄〉が、ここで思い出されよう。本作の第1部から第3部までを、ソナタ形式の提示部として、第4部を展開部+再現部、第5部を第1コーダ、第6部を第2コーダとみなせば、形式面からも、本作を古典派寄りに解釈できそうだ。

敵とか、伴侶とか、業績といった対象を、音で描写できると素朴に信じていたのでは、おそらくなかろう。そうしたイメージは、聴く人を引き寄せるためのいわば「サービス」と割り切って、実際には、もろもろの主題やモチーフを関連付け、それらの純音楽的な

楽器編成/フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

構築物を目指した――そんなふうにも 考えられるのである。

第1部 "英雄" 雄渾な変ホ長調の主 題でいきなり開始。最高潮に達する と、終止感を得ぬまま突然とぎれる。

第2部 "英雄の敵" ちょこまかした 木管楽器の動きで始まる。調の定まらない感じが妙に現代的。チューバの執拗なつぶやき。

第3部 "英雄の伴侶" ヴァイオリンのソロで開始。これが大々的に展開。いつしか英雄との愛の絶頂を迎え、また減衰してゆく。

第4部 "英雄の戦い" ちょこまかした「敵」の再来。舞台裏からのトランペット信号が、長大な戦闘の開始を告げる。一大クライマックスのあとに、楽曲冒頭が再帰。交響詩〈ドン・ファン〉等、シュトラウスの過去の作品が

引用される。

第5部 "英雄の業績" チューバのつ ぶやきの再来。引用集の続編(交響詩 〈死と変容〉〈ドン・キホーテ〉〈ツァラトゥストラはかく語りき〉等々)。

第6部 "英雄の引退と完成" チューバのつぶやき、再々来。牧歌的なイングリッシュ・ホルンの旋律が、英雄の引退を暗示する。

なお、一般に流布している本作のエンディング(最後に管楽器と打楽器による勇壮な一撃がある)は、実は改訂版によるもので、シュトラウスは当初、消え入るような形で本作を締めくくっていた。「改訂」を促したのは、誰あろう、先のレッシュであった。本日は指揮者の判断により、この珍しい初稿で演奏する。

楽器編成/フルート3、ピッコロ、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン特替)、クラリネット2、エスクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン8、トランペット5、トロンボーン3、チューバ、テナーチューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、サスペンデッド・シンバル、小太鼓、テナードラム、トライアングル、タムタム)、ハープ2、弦五部

#### 交響詩〈英雄の牛涯〉 ソロ・ヴァイオリン

#### 長原幸太 Kota Nagahara (読響コンサートマスター)

広島県出身。東京芸術大学、ジュリアード音楽院に学ぶ。1994年ヴィエニャフスキ国際コンクール (17歳以下の部)第3位。98年日本音楽コンクール最年少優勝。小澤征爾、岩城宏之、秋山和慶、ゲルハルト・ボッセらと共演。室内楽や各オーケストラの客演コンサートマスターとしても活躍し、2004年大阪フィル首席客演コンサートマスターに就任。06年から12年まで首席コンサートマスターを務めた。14年10月、読響コンサートマスターに就任。



道下京子(みちした きょうこ)・音楽評論家

#### メンデルスゾーン

### ヴァイオリン協奏曲 \*短調作品64

作曲:1844年/初演:1845年3月13日、ライプツィヒ/演奏時間:約26分

ドイツ・ロマン派を代表する作曲家、フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)。20歳の時に〈マタイ受難曲〉の復活演奏をしてバッハ再評価に貢献し、1835年にはライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者に就任、そして43年にライプツィヒ音楽院を創設する。

この作品が構想されたのは、1838 年である。しかし、ベルリンの宮廷楽 団の楽長に就任するなど多忙を極め、 創作は断続的であった。ゲヴァントハ ウス管弦楽団のコンサートマスター、 フェルディナント・ダーヴィトに助言 を受けながら作曲を進め、45年3月に 初演を果たす。その際、メンデルスゾ ーンは病気療養中のため、彼の弟子で 同楽団副指揮者ニルス・ゲーゼが指揮 台に立ち、ダーヴィトがソリストを務 めた。第1楽章では、オーケストラに よる長い前奏を置かずに独奏ヴァイオ リンによって音楽が始まり、展開部から再現部の間にカデンツァを挟む。また、三つの楽章を続けて演奏するなど、当時にしては画期的な試みがさまざまに見られる。

第1楽章 弦楽器による2小節の序奏 に導かれ、独奏ヴァイオリンは哀愁に 満ちた第1主題を奏でてゆく。独奏ヴァイオリンの華やかな演奏技巧の活か されたソナタ形式による楽章。

第2楽章 第1楽章から鳴り響くファゴットの調べにいざなわれ、8小節の序奏が現れる。3部形式に基づいた音楽は、優美な情趣に満ち溢れている。

第3楽章 ホ短調の序奏には、第2楽章中間部のモティーフが用いられており、前楽章と緊密に結びついている。ホ長調に転じると、二つの主題が競り合うように展開し、華麗なフィナーレを彩る。

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独 奏ヴァイオリン

16

#### ドヴォルザーク

### チェロ協奏曲 ロ短調作品104

作曲:1895年/初演:1896年3月19日、ロンドン/演奏時間:約40分

アントニン・ドヴォルザーク (1841 ~1904) はボヘミアの出身で、若い頃は楽団のヴィオラ奏者として活動していた。ブラームスに見出され、〈スラヴ舞曲集〉によって国際的に知られるようになる。後期ロマン派のスタイルをできる。 後期ロマン派のスタイルをできるし、そこにボヘミアの民俗的な表現を取り入れ、親しみやすい独自の作風を確立した。

米国ナショナル音楽院の院長の職に 就くために、1892年から95年までニューヨークで暮らすことになったドヴォルザーク。その間に、ボヘミア出身のチェロ奏者ハヌシュ・ヴィハンから、チェロ協奏曲の作曲を依頼される。1894年11月、この作品の創作に着手したドヴォルザークは、翌年2月にいったん書き上げ、さらに推敲を加えて6月に最終的な完成に至った。初演はドヴォルザークの指揮、そしてレオ・スターンのチェロ独奏により、1896年にロンドンで行われた。

アメリカ滞在中のドヴォルザークの 作品の多くには、アメリカの民謡や歌 曲が取り入れられている。しかし、こ の協奏曲は、祖国ボヘミアへの郷愁を 強く感じさせる。ドヴォルザークがアメリカから帰郷した1895年、彼の初恋の人で義姉にあたるヨゼフィーネ・コウニツォヴァーが亡くなってしまう。彼女は、ドヴォルザークの歌曲〈私にかまわないで〉を好んでいた。第2楽章中間部と第3楽章コーダに、彼はこの歌曲の一部を引用する。とりわけ第3楽章のコーダは、彼女が亡くなった後に書き換えられており、ドヴォルザークの哀しみや故郷への愛が込められている。

第1楽章 曲の冒頭にクラリネットが 奏でる主要主題と、強奏によるトゥッ ティに続いて示されるホルンによる表 情豊かな副主題を軸に、独奏チェロが 華麗な妙技を繰り広げていく。

第2楽章 3部形式に基づき、木管楽器が歌い上げる牧歌的な旋律が印象的な主部ののち、ト短調の中間部では表情が一変する。美しい叙情性に満ち満ちた音楽。

第3楽章 自由なスタイルのロンド 形式で、前述したコーダが付加されて いる。 チャイコフスキー

# ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調作品23

作曲:1875年/初演:1875年10月25日、ボストン/演奏時間:約32分

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー (1840~93) は、西欧の音楽語法を土台にウクライナの民謡などを融合し、独自の透明で優美な表現を確立した。法務省に勤務したものの、音楽を志すべく1861年にアントン・ルビンシテインがサンクトペテルブルクに開設した音楽学校で専門教育を受ける。卒業後はアントンの弟、ニコライがモスクワに新たに創設した音楽院に、作曲の教師として赴任した。

チャイコフスキーは3曲のピアノ協奏曲を手掛けている。本日演奏される第1番は1875年2月に書き上げられた。彼はニコライ・ルビンシテインに初演を依頼したところ、ニコライは形式や調性の選択などの点での「不器用さ」を指摘し、作品を批判する。

そこでチャイコフスキーは、作曲家で名ピアニストのハンス・フォン・ビューローにこの曲の初演を依頼すると、ビューローは作品を絶賛。同年10月にボストンで初演された後、作品には修正や改訂が施され、現在演奏されている〈ピアノ協奏曲 第1番〉も改訂稿である。第1楽章において長大な導

入部を取り入れ、誰もが聴いたことのあるような有名なメロディが表されるが、主部では回帰されることはない。何と言っても、魅力は超絶技巧的なピアノ・パートの妙技である。分厚い和音やオクターヴ奏法など、当時の新しいピアノ奏法が随所に用いられ、"ヴィルトゥオーソ協奏曲"を代表する絢爛豪華な作品である。

第1楽章 堂々とした風格の長い導入部の後、変ロ短調のソナタ形式主部が続く。665小節にも及ぶ長大な楽章。第2楽章 夢幻的な雰囲気の緩徐楽章。中間部では、フランスのシャンソンからの引用をヴィオラとチェロが奏でる。

第3楽章 オーケストラの前奏に続き、ウクライナ民謡をとり入れたロンド主題をピアノが提示する。この主題は、のちに現れるヴァイオリンによる変ニ長調の副主題とともに緊密に展開し、圧倒的なクライマックスを形成する。

楽器編成/フルート2 (ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランベット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器 (トライアングル)、弦五部、独奏チェロ

楽器編成/フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ、 弦五部、独奏ピアノ